

①将来目指したい道が決まっていない私にとって、ディレクトフォースはとても貴重な体験となりました。日本財団や笹川平和財団の方々の話を伺うため、20分間話が続くか、質問が途切れてしまわないか等、ずっと不安でした。しかし財団の方々の話に引き込まれ、意見交換しているうちに、あっという間に20分は過ぎ、充実した時間を過ごすことができましたと思います。

1 人目のかた・・・国際協力チームでプロジェクトプログラムを行っている。国内の学生が留学できるように奨学金を与える、日本に來ている留学生を支援する、フィリピンの無国籍者に国籍を与える等。実際に奨学金を受け取っている学生と会う機会はほとんど無いが、たまに会えた時に、その人が元気よく頑張っていると感じる時にやりがいを感じる。自分の団体、パートナー団体、学生の3つの関係をうまく保つことで成り立っている。戦争で親も親戚も失い、親の名前もわからない人のために、暗闇の中を手探りするような調査をし、日本国籍を回復させることが出来た時は達成感を感じる。

2 人目のかた・・・建築の竹中工務店。全国のドーム球場、東京タワーの建設に携わった。もの作りが好きで何が形に残るものを作りたいと思い、建築関係の仕事を選んだ。外国と日本では、習慣、風習が違うだけで、あまり価値観の違いは無いと考えられている。海外での仕事で現地の人と良い信頼関係を築く手段の一つとして、現地の言語を教えてもらい、こちらは日本語を教えること。そうすることでお互いに言語を習得でき、また、現地の人と話す機会が増えるため、一石二鳥である。どんなに文法を覚えても、実際に口にして使わないと、外国語は上達しない。面接では、入室してから席に座るまでに結果が決まる。というのは、歩き方や目からその人の気持ちが見えるから。

3 人目のかた・・・中国語書籍の翻訳等。日本人は計画性があり、狭い価値観の中で生活している。それは中国人にとって窮屈である。語学は世界で戦うときに武器となるから身につけておいた方がいい。留学などは2年以上海外で生活するべき。2年以上だと語学だけではなく考え方や価値観をも身につけることができる。中国は日本に対して今もなお軍国主義のイメージが残っている。近隣の国でもお互いを正しく認識出来ていないと言える。教科書で習うことがすべてではない。

4 人目のかた・・・キューピードレッシングの商品開発。中でも味を担当している。人間力を伸ばすことが大事。

②今回の企業訪問で1番強く感じたことは、何かを成し遂げた人は、自分を強く持っているということ。赤坂動物病院の柴内院長は動物の命に携わる上でしっかりと自分の考えを持ち、私たちが何を伺っても、前から答えを準備していたように論理的で考えさせられるお話を聞かせていただきました。

質疑応答

◎今まで診療した動物の中で最も印象深いもの→23歳まで生きた猫。飼い主は18歳の兄と16歳の妹。猫が亡くなった時に「猫にとっては長生きと言えるけど、もっと生きて欲しかった。生まれた時からそばにいて一緒に成長してきた大事な家族であり、嬉しいことも悲しいことも教えてくれた人生最大の先生だった。だから23年も生きてくれて感謝している。ほんとに偉い子だった。」と言ったそうだ。柴内院長にとって、動物に対して感謝してお別れできるというのが理想の姿であり、このようにお別れできることをいつも願っている。人類が進化する過程のなかで

選ばれた犬と猫。それは人間の勝手な選択であるのに、私たちはそのことを忘れていて、共に歩んでくれた動物に対して、人類として感謝の心を持つべきだ。

◎動物病院といえども、相手をするのは動物だけではなくその飼い主とも関わる。飼い主によっては苦勞することもあるとおもうがその際はどのように対応しているか(優先順位など)→緊急事態以外は順番優先。皆ペットを愛する気持ちがあり、自分の子を一番に思うのは同じ。だからこそ不公平はだめ。飼い主としてもわがままを言わないことが大事。獣医として、動物の命を救うことだけではなく飼い主とのよいコミュニケーションがとれることも問われる。飼い主の心を開かせることで飼い主の望む治療を選択することが出来る。ペットにとっても飼い主にとってもよりよい治療をすることが出来る。

◎殺処分という言葉自体間違いだと提唱しているが、具体的には殺処分のように人間の手によって動物の命を奪う日本のやり方についてどうお考えか→殺処分という行政用語自体違う。こんなにも恐ろしく残虐な言葉を平気で使うなんてできない。動物は今を生きていて、人間とちがって将来、老後、病気を恐れない。だから、例えば飼っている犬が初期のガンであると宣告されても、犬の将来を思い悲しむのは人間だけで、犬は今痛みを感じていないため不安など一切感じていない。ただ、自分のことで飼い主が悲しんでいるのは感じるから、犬は理由もわからないまま自分をせめてしまうかもしれない。犬を大切に思って安楽死という選択をすることもあるが、それは人間が、犬が苦しむ姿を見たくないというような勝手な理由で実行していいことではないのである。獣医としても、飼い主としても安楽処置という選択が最良となった場合は、そのような選択も犬のためになる。そういう意味で動物は、生きてるのが辛くなったら人の手で命を絶つことができるため、人間よりも幸せであると言える。人間は、どんなに望んでも人に殺してもらえず、どんなに優秀な医者でさえ処置として安楽処置を選ぶと法に触れてしまう。それほど動物、人の生死の判断は重いものであり、だからこそ、動物の安楽処置というのは慎重に行われなくてはならない。

感想

施設見学では院内すべての部屋を見させていただきました。主に2階が診療関係、3階がしつけ教室などその他の部屋となっていました。3階の院内動物の部屋では、動物達が引き取り先が決まった時に人やテレビなどの音にびっくりしてストレスを感じないように、24時間ラジオをつけっぱなしにしていました。しつけ教室は広く、大型犬でも思い切り走り回れるほどの広さでした。あらゆるところで動物を第一に考えてられているのを感じました。手術をしている様子も見ることができました。院長先生が手術室の自動ドアを開けてしまい、治療中の獣医さんに「先生ドア開けないで笑笑」と言われていました。命を扱う場だから常に緊張感を持って働いておられるのかと思っていたけれど、緊張感を持ちつつも温かく、笑顔があり、そのような雰囲気も動物達にとって居心地がよい場所作りにつながるのかなと思いました。院内にはあらゆるところに動物達が入ったゲージがありました。入院中、拾われた犬猫、1時預かりなど理由はそれぞれでしたが、どの犬も私たちを見て震え、吠え始めました。しかし柴内院長が「はーい子ちゃんねー。〇〇ちゃん。」と優しい笑顔で話しかけると、皆落ち着き、おとなしくなりました。いつもお世話をしているからという理由もあると思いますが、柴内院長の心の温かさと動物に対する愛を動物も感じているから、動物達は院内でもリラックスした表情を見せるのかなと思いました。

私は獣医としてではなく、ボランティアのような形で動物の命を救う活動に貢献したいと考

えていました。今回の企業訪問を通してその考えは変わらなかったけれど、動物の命に携わる活動をする際の心構えや考え方を学ぶことができ、みのりある研修となりました。また、今まで漠然としていた「大学進学」もオープンキャンパスや OBOG の方のお話を聞いて、少しずつ方向性が見えてきました。

今回お話を聞くことができた財団の方や OBOG の方のように、物事を真剣に捉え深く考え、広い視野で世界を見ることが出来る大人になりたいと思いました。また、一般的な価値観にとらわれずに、自分の意思を強く持てる大人にもなりたいと思いました。そのためにまずは今の自分を知ることから始めなければなりません。自分を知らないまま社会に飛び込んだら自分を見失ってしまうなど強く感じました。社会で強く生きていくために、二高での生活を有意義なものにし、優れた仲間や先生方から多くのものを吸収して、立派と言われる二高の OG になりたいです。